

凍てゆるむ頃や大地の揺れきたり

境野大波（『青葉抄』）

震災の始まりを静かに伝え今に繋がる一句である。二年前、東北旅行で石巻に入る。海岸から内陸までの一キロほどの物流倉庫のベルト地帯がずっと続き、海を生業にしている街から海が失せた異様な光景だった。震災から福島産の農作物は市場に出せなくなる。放射能検査をパスしてもダメなのだ。二本松教会がいてもたってもいられず、軽トラに収穫したばかりの農産物をいっぱい載せ、朝4時に福島を出て日曜日の都心の教会で「やさしい畑」として販売する。2時間ほどで完売し空になった軽トラは福島に戻る。今もやさしい畑は続いている。原子力専門家の講演を聞く。彼は研究中に「平和利用はできない。人間の手に負えるものではない」と気づいて40年以上原発反対を訴えている。原発事故の収束・原発の廃炉は不可能と断言している。危険極まりない原発の事故現場で黙々と働いてくれている人たちがまだたくさんいるのだが。最近、『俳句界』の「板壁に牛飼の遺書やませ吹く 中嶋鬼谷」に立ち止まる。「原発さえなければ」の遺書を残した酪農家のことだ。震災直後は苦しみ・悲しみが大きすぎて震災俳句に心がついていかなかった。しかし今は俳句という短い詩だからこそ強く深く心に届くことばの力をひしひし感じている。そして大津波のこと・原発事故のことは今なお続いているのだ。それを「忘れないこと」はわたしの義務である。